

5 道徳，学級活動を通して

(1) 道徳

未熟な考え方や道徳的判断力の低さから起こるいじめに対し、道徳の時間が大きな力を発揮します。とりわけ、いじめ問題は、他人を思いやる心や人権意識の欠如から発生するものであり、いじめをしない、許さないという、人間性豊かな心を育てることが大切です。児童生徒が心根が揺さぶられる教材や資料に出会うことで、人としての「気高さ」や「心づかい」・「やさしさ」等に触れれば、自分自身の生活や行動を省み、いじめの抑止に繋がると考えられます。

道徳の時間の年間指導計画には、自他を尊重する態度、人権を守る態度の育成など、いじめ防止に深く関わりのある題材を取り上げることが位置付け、いじめを許さない心情を深めることができる内容になるように工夫が必要です。そして、学級の児童生徒の実態や発達段階に応じた適切な資料を選定し、生徒の心に響く道徳の時間となるよう実践に努めましょう。また、指導に当たっては、教え込むのではなく、学んだことから自分自身を振り返らせること、自分を見つめさせることができるよう指導していくとよいでしょう。

- ① 「思いやり」「寛容」「公正・公平」等、道徳的価値の自覚を深め、「いじめをしない・許さない」資質を育む道徳の時間の工夫をする。
- ② 人間の弱さや至らなさ等に共感し、より良い生き方について考えられる発問の工夫をする。
- ③ 児童生徒が互いの気持ちや考えを聞き合い、確かめ合えるような話し合いをする。
- ④ 児童生徒の身近な体験を想起できる道徳の時間の導入・まとめの工夫をする。
- ⑤ いじめの「被害者」「加害者」「観衆」「傍観者」それぞれの立場から考えられる読み物資料等の工夫をする。
- ⑥ 全教育活動を通じて、「個性伸長」や「生命尊重」等、自尊感情を高め、生命の大切さを学ぶ機会を充実する。

(2) 学級活動

児童生徒は学校生活の大半を学級で過ごすため、いじめの発生を防止するには、「居場所づくり」や「絆づくり」をキーワードにした学級づくりがとても重要です。学級活動を基盤とした集団活動や体験的な活動を通して、より良い人間関係を築く力や社会性の育成を図ることが、いじめ防止につながります。

いじめを発生させない学級づくりのためには、児童生徒同士が互いの良さを認め合うことができる、より良い人間関係づくりに取り組むことが大切です。以下は、学級活動で望ましい人間関係づくりのための有効な手法です。

ア 構成的グループエンカウンター

子供同士が本音で表現し合い、それを互いに認め合う体験的な活動で、自己理解・他者理解・自己受容・信頼体験・感受性の促進・自己主張の6つをねらいとするエクササイズを通し、「触れ合い」と「自己発見」を体験します。活動を通して信頼感や自尊感情を高める効果があります。

【具体例】 「良いことメッセージ」(展開例，振り返りシート)

<準備>

- ・名簿 (一覧表になっているもの)
- ・封筒 (各自の名前が書いてあるもの)
- ・メッセージを貼る紙 (個人用)
- ・振り返り用紙
- ・はさみ
- ・のり

<展開例>

1 この時間のねらいを伝える

友だちの良いところを探してその人に伝え、自分も友だちから見て良いところを言ってもらいます。そのことにより、自分の良さに気付かせるようにします。

2 エクササイズの説明

「人それぞれ良いところがありますが、気付いていてもその人に直接伝えてあげるとはあまりありません。そこで、今日は良いところ、好感が持てるところをお互いに知らせ合う機会を持ちましょう。」

3 エクササイズの実施

- ① クラス全員の名前の入った一覧表を配り、簡単な言葉で枠の中におさまるように記入する。
- ② 記入が済んだ人から線に沿って切り離し、各個人の名前が書いてある封筒に入れる。
- ③ それぞれの自分の封筒を持ち帰り、自席で開封し、自分の好きなメッセージ6枚を選び用紙に貼り付ける。
- ④ 担当が用紙を回収し、名前を告げずに6つのメッセージを読み上げて、名前を当てさせるゲームをする。

4 シェアリング

- ① 良いところを書いているときの気持ち、封筒を開けるときの気持ちを発表し合う。
- ② 「振り返り用紙」に記入し、自分の体験を振り返り、自己評価し、感想を記入する。

「良いことメッセージ」 振り返り用紙

____年____組 氏名_____

A はい B だいたい C あまり D いいえ

- | | | | | |
|----------------------------|---|---|---|---|
| ① 集中して取り組めましたか。 | A | B | C | D |
| ② 素直に自分の思っていることを表現できましたか。 | A | B | C | D |
| ③ 楽しく取り組めましたか。 | A | B | C | D |
| ④ 説明を真剣に聞けましたか。 | A | B | C | D |
| ⑤ 他人の気持ちを考える場面はありましたか。 | A | B | C | D |
| ⑥ またエクササイズをやってみたいですか。 | A | B | C | D |
| ⑦ 自由に感想を書きましょう。(今の気持ちを中心に) | | | | |

イ ピア・サポート・プログラム

人間関係上の摩擦やトラブルに悩み、葛藤や不安を抱えている子供たちに、基礎的な対人関係能力を訓練したり、ストレスを上手にコントロールさせたり、問題を解決する思考訓練を行ったりすることで、生徒指導上の問題を起きにくくするようにしたプログラムです。ゲームやロールプレイングを活用した体験的なトレーニングを通して、児童生徒の基礎的な社会スキル（技能）を段階的に育て、最終的には子供同士（仲間＝ピア）が互いに支え合えるような関係を作り出そうとすることに取り組みます。

【具体例】 「聴き方名人になろう」(ワークシート)

<準備>

- ・生徒一人一人が思い出のワンシーンを絵に描く。

「聴き方名人になろう」

____年 ____組 氏名_____

1 イメージしよう

話を聴いて、その情景が目には浮かびますか？その情景が「イメージ」です。想い出のワンシーンを絵に描いて、その絵を見せずに、話してみましよう。聴き手は、話を聴いて絵に描いてみます。同じ絵になったでしょうか？

2 質問しよう

質問の仕方

(1) 質問のはじめと終わり

はじめ・・・「あの、すみません。」「ちょっと聴いていいですか？」
「よくわからないのだけれど。」

終わり・・・「わかりました。」「なるほど。」「ありがとう。」

(2) クローズドクエスチョン

→相手が「はい」「いいえ」で答えなければならない質問。

- *簡単に情報を得たいとき
- *あまり親しくないとき
- *話のはじめ

(3) オープンクエスチョン

→相手が「はい」「いいえ」で答えられない質問。

- *多くの情報を得たいとき
- *5W1Hで聞く質問

「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「なぜ」「どのように」

質問するということは、相手に関心があるという証でもあります。質問して、より多くの情報をもらうことで、相手のことがもっと良くわかり、相手の気持ちも味わえるようになります。

ピア・サポーター同士で練習してみよう。

- ・クローズドクエスチョンを使って質問しよう。
- ・オープンクエスチョンを使って質問しよう。
- ・どのペアが長く話を続けられたか、競争してみよう。

ウ ソーシャル・スキル・トレーニング

小集団によるグループワークの中で、子供たちが互いを意識し、助け合い、お互いを認めるところから、言葉、コミュニケーション、社会性のスキルアップを図ります。人付き合いのコツを身に付けることや、困難な場面回避のためのスキル等、良好な人間関係と暮らしやすさを自ら築けることを目的とした練習を段階的に行います。

【具体例】 「上手な聴き方」(展開例, ワークシート)

<準備>

- ・ストップウォッチ
- ・ワークシート

<展開例>



1	人の話を聴くと、どんな良いことがあるのかを考える。		
2	ロールプレイを見て、聴き方について考える。※2つのモデリングを見る。		
	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>聴き方Ⅰ（望ましくない）</p> <p>次のことに気を付けて、相手の話を聴いて下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○相手に体を向けない ○話している人を見ない ○相づちを打たない </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>聴き方Ⅱ（望ましい）</p> <p>次のことに気を付けて、相手の話を聴いて下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○相手に体を向ける ○話している人を見る ○相づちを打つ </td> </tr> </table>	<p>聴き方Ⅰ（望ましくない）</p> <p>次のことに気を付けて、相手の話を聴いて下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○相手に体を向けない ○話している人を見ない ○相づちを打たない 	<p>聴き方Ⅱ（望ましい）</p> <p>次のことに気を付けて、相手の話を聴いて下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○相手に体を向ける ○話している人を見る ○相づちを打つ
<p>聴き方Ⅰ（望ましくない）</p> <p>次のことに気を付けて、相手の話を聴いて下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○相手に体を向けない ○話している人を見ない ○相づちを打たない 	<p>聴き方Ⅱ（望ましい）</p> <p>次のことに気を付けて、相手の話を聴いて下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○相手に体を向ける ○話している人を見る ○相づちを打つ 		
	<ul style="list-style-type: none"> ・話し役が感想を述べる。 ・2つの聴き方の違いを話し合う。 ・聴き方の3つのポイントを確認する。 		
3	実際にロールプレイをして練習する。		
	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアになって聴き方を練習する。 ※時間を決めて役割（話し役、聴き役）を交代する。 ・感想を話し合う。 ・相手を替えて練習する。 		
4	お互いの聴き方の良かったところを話し合い、感想を発表する。		

上手な聴き方

_____年_____組 氏名_____

2人1組のペアを作って、1人が簡単な話をして、もう1人が聴き役になってみよう。

話のテーマ 「昨日見たテレビ」
「今、一番興味のあること」
「好きなゲーム」

から1つ決めよう。

- ① テーマが決まったら1分間やってみよう。
- ② 交代して1分間やってみよう。
- ③ どんな聴き方をしたら、相手の人は話しやすくなるんだろう。
- ④ テーマが決まったら1分間やってみよう。
- ⑤ 交代して1分間やってみよう。
- ⑥ 話の聴き方はどうでしたか？話をした相手に、よくできたところは○、もう少しのところは△を記入してもらおう。

上手に聴くために	○△	具体的に気付いたこと
ア 相手の顔を見る		
イ 相手に体を向ける		
ウ 相づちを打つ		
エ 最後まで聴く		
オ 質問する		
カ 相手の言葉を繰り返す		

- ⑦ 「①・②」のときと、③を考えた後の、「④・⑤」のときを比べながら、聴き方や話しやすさについてまとめよう。

エ アサーション・トレーニング

ソーシャル・スキルの中でも特にコミュニケーション，その中でも特に自己主張に関してピックアップしたものです。自己主張に関するいくつかの誤った考えに対する心理教育から始まり，攻撃的な自己主張や不十分な自己主張との違いを明らかにした上で，適切な自己主張（＝アサーション）について学ぶことができます。学ぶ方法としてはソーシャル・スキル・トレーニングと同じです。

【具体例】 「それはお断り」～大切なもの～（ワークシート）

「それはお断り」～大切なもの～

____年____組 氏名_____

<進め方>

- 1 ペアになり，頼む役と断る役を決める。
- 2 断る役の人，人には貸せない大切なものを1つ決める。そして，頼む役の人に自分の大切なものが何であるかを伝える。
- 3 断る役の人，どんなことがあっても断り続け，頼む役の人は手を替え品を替え，ひたすら頼み続ける。1分後に，断る役の人が折り合いをつけて貸してあげる。
- 4 役割を交替して行う。
- 5 断る役をやった時の気持ち・頼む役をやった時の気持ちを伝え合う。

【エクササイズを振り返って】

- 1 断る役をやったとき，どんな気持ちでしたか？
 - A 自分の意志を通して断り切れたので良かった。
 - B 相手に悪い気もしたが，大切なものなので断るのは仕方がない。
 - C 相手に悪い気がして，断るのが難しかった。
 - D 断るのがつらくて，貸してやりたくなかった。
 - E その他（ _____ ）
- 2 頼む役をやったとき，どんな気持ちでしたか？
 - A 大切なものを貸せないのは当然なので，断られても仕方がない。
 - B 断られるのは少し嫌だったけど，仕方がない。
 - C 断られて悲しかった。
 - D 断る相手が嫌になった。
 - E その他（ _____ ）
- 3 このエクササイズをやってみて，気付いたこと，感じたこと，考えたことなどを書きましょう。

オ ピア・メディエーション（仲間による仲裁）

いじめの原因は、些細な意見の食い違いや口論であることも多いので、話し合いによってお互いに納得のいく“落とし所”を見つけていけば、いじめに発展するのを防ぐことができるの考えから、児童生徒に「仲裁能力」をつけようとするものです。「中立に立つこと」の意義に加えて、発言権を尊重することの大切さや、時間内に合意に達するためのテクニックなど、問題解決の技術を総合的に習得することが目標となるでしょう。

具体的には、A・B間で『『悪口を言った・言わない』のトラブルが起きた時』『『掃除をサボった・サボらない』で揉めている時』のお互いの言い分をセリフとして渡し、仲裁者のCがそれぞれA・Bと個別に会い、公平に双方の言い分に耳を傾け、両者の合意点を探って解決に導く（仲裁案を出す）というロールプレイを行います。



他の自治体や大学等がピア・メディエーションを用いて行った取組の実践例がホームページで紹介されています。また、ピア・メディエーションを用いたクラスづくりに関する教材付きの書籍が刊行されていますので、これらを参考にすることもできます。

カ ロールプレイ

いじめを自分の問題としてとらえ、「絶対にしてはいけない」と自分自身で確認するために、ロールプレイを中心とした「法教育教材」が開発されています。これらの教材は、各地の弁護士会が行っているジュニア・ロー・スクールなどのために開発されており、弁護士会などに問い合わせると良いでしょう。たとえば次のようなものがあります。

- (ア) ドラえもんの一場面をセリフ化し、「いじめっ子＝ジャイアン」「いじめられっ子＝のび太」「観衆＝スネ夫」「傍観者＝しずかちゃん」でロールプレイを行います。このパターンだと、「いじめっ子」だけを考えさせられるだけでなく、「観衆」や「傍観者」はどのような態度を取るべきかも考えさせることができます。
- (イ) 事例として、「クラス対抗の野球大会で優勝を目指し、A組は毎日練習に励んでいました。リーダーはクラスで一番野球がうまいイチロー君です。大会当日、A組はついに決勝まで勝ち進みました。2対1でA組リードの9回裏、相手の外野フライをイチロー君が落球して、逆転サヨナラ負けを喫してしまいました。翌日、イチロー君がクラスの仲良しジロー君に挨拶するとジロー君から無視されました。それどころか、ジロー君はクラスの何人かに『イチローは運動神経が鈍いね。それに疫病神だぜ。次の球技大会では外そうぜ』と言いふらしています。そこでイチロー君は、仲良しのサブロー君たちに『ジローは自分が野球が下手なくせに、悪口を言いふらしている最低なやつだよ。これからは、ジローなんかと遊ぶのをやめて仲間はずれにしてやろうぜ』と言いました。」というものでロールプレイを行かせます。「いじめる気持ちができる」「いじめられる側が悪いのか」などを、第三者のサブロー君なども含めて考えさせるものです。



6 学校生活、学校行事、児童・生徒会活動、部活動の中で

(1) 学校生活

未然防止は、授業だけでなく日々の学校生活全体の中で取り組んでいかなければならないものです。教職員には、日常の観察から児童生徒の実態を把握し、様々な場面で変化を感じ取ることでできる高い意識を持ち続けることが求められます。

* A君は、1週間程前から毎日のように授業が始まってからトイレに行きたがるようになった。特に体調は悪くないようで、「次は、休み時間に行くように」という指導にも「はい」と素直に応じるのだが…。

→ あれ？おや？もしかして…

トイレは大人の目が届きにくく、いじめが行われやすい場所。いじめられている児童生徒は怖くて休み時間に行くことができない。授業が始まってからならば、いじめる側は教室にいますので、安心できる。

もしかしたらA君はいじめられているかも…。

* 場面〔朝の会・帰りの会・休み時間・昼食の時間・清掃時間・部活動（クラブ活動）等〕



* 視点〔児童生徒の顔色・姿勢・言葉づかい・表情・視線・声をかけたときの反応
教室や活動場所の汚れ・机の配置 等〕

➡ 資料（p108～p111）等を参考に！

児童生徒が安心して学校生活を送ることができ、「いじめなんて、くだらないよね」と言い合えるような環境を作っていくことが大切です。そのためにも、児童生徒自身がいじめ防止に主体的に取り組めるような活動を計画的に継続して行う必要があります。

《目的》

児童生徒同士による良好な人間関係づくり

「いじめは絶対に許されない」意識の醸成

道徳性（公共心・礼節・思いやり）の育成

《具体的な活動》

- ・児童会・生徒会活動の活性化
- ・ボランティア活動への積極的な参加
- ・挨拶の励行・規範意識の向上
- ・マナー・モラルの育成
- ・異年齢集団による活動
- ・コミュニケーション能力の育成
- ・自己有用感・他を思いやる心の育成

いじめの背景にあるストレスやストレッサー（ストレスの要因）に負けない、いじめに向かわない児童生徒を育成するためには、「人と関わることを喜びと感じる体験」を積み重ねることが大切です。「面倒なことやイヤなこともあるけれど、他の人と関わることは楽しい・役に立てたらうれしい」と感じる場や機会を意図的に作っていきましょう。

相手の存在や尊厳を認めることのできる児童生徒は、自分自身が他者から認められていたり、認められた体験を持っていたりします。「自分を認めてもらっている・自分は大切にされている」と感じたことのある児童生徒は、「他者を認める・大切にすること」ができると考えられます。主体的に取り組む協働的な活動を通して、自分が他者から認められ、他者の役に立っているという「自己有用感」を児童生徒全員が感じ取れるようにすることが重要です。

* ボランティア活動参加による生徒の変容

B君は、日頃から粗暴なふるまいが多く、周囲とのトラブルが絶えなかった。家庭的な問題もあり、大人への不信感が強く指導にも反抗的だった。ある時、地域の不用品回収の作業にボランティアで参加し、不用品の搬出や移動等を行って、地域の高齢者から「ありがとう」と繰り返し感謝された。その後、相変わらずトラブルはあるものの、表情が柔和になり、攻撃的な行動や暴言が減り、周囲への気遣いを見せるようになった。

(2) 学校行事

*賞は獲ったけれど…

C先生は何事にも全力投球。文化祭でも「賞を獲るぞ!」と生徒を叱咤激励し、準備から全て失敗のないように段取りして作業を進めた。トラブルが起きても全てC先生が対応し、生徒は先生の指示通りに動き、見事に賞を獲得した。

学校行事を通して、児童生徒は大きく成長することができます。しかし、ただ「体験する」・「子供同士の交流を深める」だけで終わってしまっては不十分です。自発的に取り組む場面を設定し、達成感や成就感を持たせるだけでなく、他の児童生徒・大人との関わり合いを通して人と関わることの喜びや大切さに気付いていくこと、互いに関わり合いながら、絆づくりを進め、他人の役に立っている・他人から認められているといった「自己有用感」を獲得していくことを目標として、具体的な計画を立てて取り組んでいきましょう。失敗やトラブルは、あって当たり前のものです。成長のためのチャンスと考えましょう。

どの行事についても、主体的に児童生徒に取り組ませることは当然ですが、教職員の取組の姿勢が集団や個人に大きく影響することを忘れてはいけません。

《担任の姿勢》

児童生徒一人一人を大切にできる姿勢が理解されている親和的な学級

⇒

《児童生徒》

- ・リーダーの不満やいら立ちを受け止めようとする
- ・非協力的な児童生徒の気持ちをわかろうとする
- ・主体的に困難を乗り越えようとする意欲が育つ

権威や罰等、威圧的な指導をベースに取組を進める学級

→

- ・表と裏を使い分けるようになる
(強者の前では取り繕い、弱者には威圧的になる)

明確な指導目標を持たず、意欲に欠け自主と言う言葉のもとに放任した学級

→

- ・利己的欲求の肥大化
- ・勝手気ままな集団の形成

(参考;「いじめ根絶!横浜メソッド」)

本来は児童生徒の成長を促す場となるはずの学校行事が、いじめを生み出す土壌を作り出してしまいうこともあり得ます。児童生徒を主体的に動かしつつ、教職員がどのようにサポートしていくかという視点が重要です。

(3) 児童会・生徒会活動

児童会・生徒会による活動は、いじめの未然防止にも大変効果的です。いじめをなくす取組を児童生徒が中心となって推進していく中で、母校の良き伝統を継承する意識や校風づくりに一人一人が参加しているという自覚と責任ある行動が生まれてきます。さらに、リーダーを中心に自分たちの力で問題を解決していく実践力が育成されます。(第7章 実践例 参照)

ここで何よりも重要なことは、「児童生徒自身がいじめの問題を自分たちの問題として受け止めているか」ということです。他から「やらされている」と感じていたのでは意味がありません。自分たちにできることを主体的に考えて行動するように働きかけていくことが必要です。全ての児童生徒がいじめの問題への取組についての意義を理解し主体的に参加できる活動になっているかどうかをチェックし、陰で支えることに徹するのが教職員の役割です。

(4) 部活動

*楽しい学校生活のはずが…

D君は、入学後憧れの部活に入部。熱心に活動していた。チームは強豪として有名であり、練習も厳しかったが、充実した毎日を送っていた。しかし、レギュラーに選ばれたことをきっかけに、同期や上級生から無視されたり、嫌がらせを受けたりするようになった。顧問には怖くて相談できず、練習を休むことも増えた。クラスでは何もないように振舞っていたが、同じ部活の生徒からネットで悪口を書きこまれ、次第にクラスでも無視されるようになった。その後、体調を崩して退部。学校にも登校できなくなり、1年で退学した。

「リーダーを中心とした集団づくりと主体的な活動の実践・集団として活動する利点を生かした協調性や自主性の伸長・人間形成の場としての活動」といった点から、部活動は、児童生徒の育成に大きな役割を果たしています。しかし、異年齢の集団であり、先輩・後輩の関係や、運動の得手不得手、技能の巧拙等、様々な人間関係の中で行われているため、いじめに繋がる可能性が高く、いじめの温床になりやすいという側面もあります。顧問は次のような点に留意し指導していく必要があります。

ア 部員間の密接なつながり

部内では、児童生徒同士が密接な人間関係になり過ぎて、トラブルが発生することも多くなります。行き過ぎた上下関係の中での理不尽な暴力行為や強要行為、「ふざけていただけ」「遊びだった」という言葉に象徴される人権意識の欠如等からくる問題行動は、どこの部でも起こり得ます。さらに、集団の中で「たいしたことではない」「それくらい我慢すべきだ」という雰囲気が強いと被害者は被害を言い出せず、行為が繰り返される可能性もあります。また、部の仲間内の共有の秘密として、トラブルが外部に漏れにくいという問題も見逃すことはできません。

イ 部員間の競争

部活動では「レギュラー争い」等、部員間での競争が当然のこととして起こり得ます。本来的には、仲間と切磋琢磨し自分をより高めるための良い環境となる反面、過度の競争により、部員間での「勝ち」と「負け」という意識を作り出すことも考えられます。傲慢な態度や言動、羨望や嫉妬等が、人間関係に亀裂を生じさせ、いじめのきっかけになることもあります。

ウ 目標や結果を共有する関係であること

試合の勝敗や上位大会への進出、コンクールでの入賞等、部員同士は目標や結果を共有する関係です。部員たちは、感動を分かち合い、達成感や成就感、連帯感を味わい、大きく成長することができます。しかし、時には「一人の失敗は全体の失敗である」といった負の結果を共有することもあります。これは通常、よりよい集団作りに作用することが期待できる一方で、部員の中には負の結果を共有することができず、失敗した生徒に対するからかい、嫌がらせや批判が生まれ、いじめの引き金になってしまうこともあります。

エ 顧問の影響

顧問が熱心に指導するあまり、勝敗や技術の向上ばかりにこだわったり、結果だけを目的にした指導（勝利至上主義）に陥ると、児童生徒のストレスが強まり、トラブルを生みやすくなります。顧問の態度や言動は、本人が考える以上に影響力が大きく、部員にプレッシャーを与えます。気付かないうちに、いじめの原因になっていたり、いじめを容認していた等ということがないように気を付けましょう。自分の言動や行動を客観的に見つめることも、時には必要です。さらに、体罰は暴力を容認するものであり、児童生徒の健全な成長と人格の形成を阻害し、いじめの遠因となり得ます。言葉の暴力も含め、決して行ってはならないことは言うまでもありません。

顧問は、このようなことを念頭におき、常に部員に積極的に声掛けをしたり、ミーティングで部員同士の考え方を共有させたりする等、望ましい人間関係を築いていくよう努力しなくてはなりません。顧問と部員との間にしっかりとした信頼関係を構築し、児童生徒間のコミュニケーション力を育成することもまた、部活動指導の一環と考えるべきでしょう。

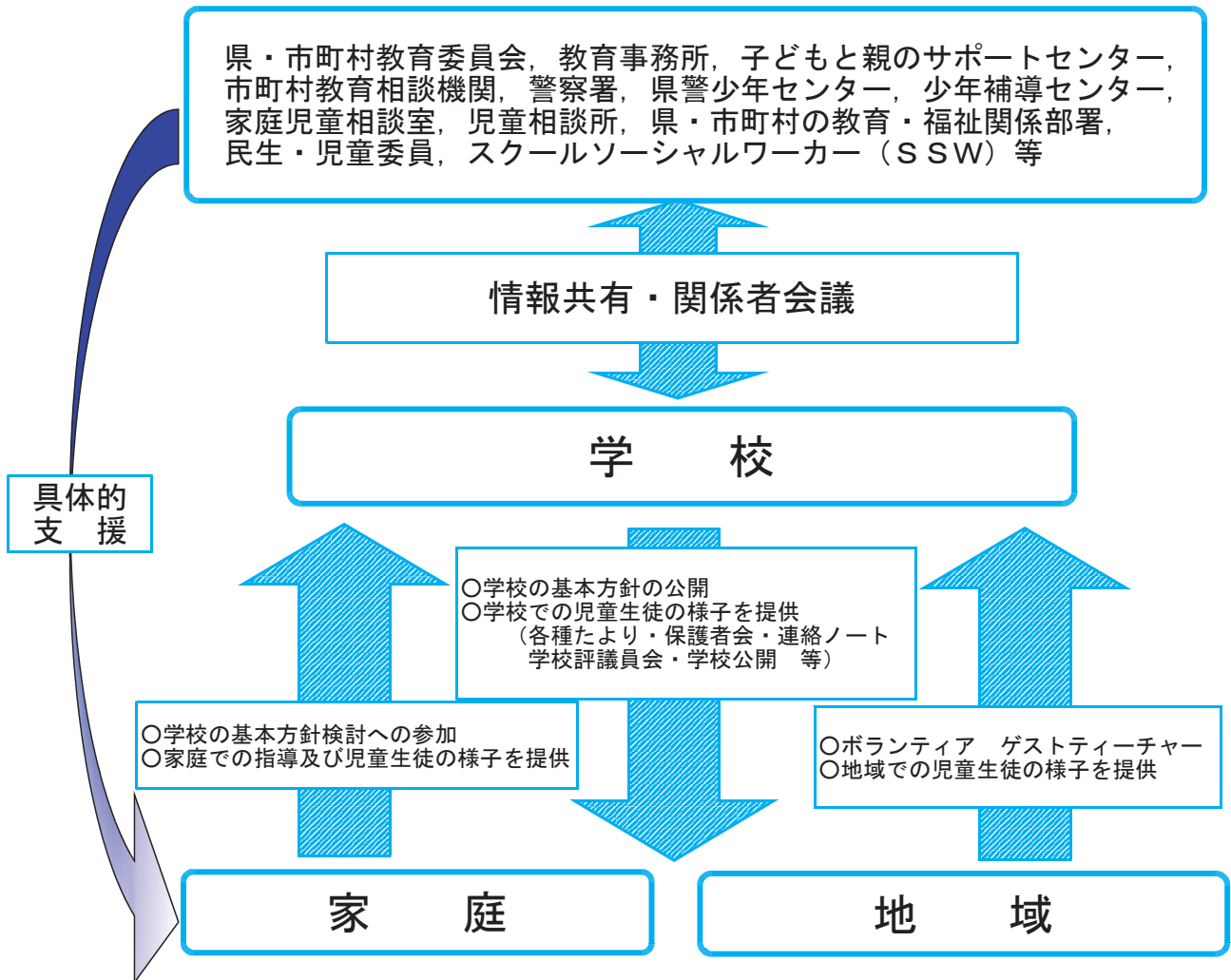
普段の学校生活においても児童生徒を注意深く観察し、活動の準備中や後片付けのとき等も児童生徒の様子を把握する工夫等をする必要があります。その一方で、顧問が全て抱え込むのではなく、学級担任や学年主任、保護者とも連携を密にし、情報を共有しながらお互いに相談できる体制づくりをしていくことが重要です。



7 家庭，地域，関係機関との連携による未然防止

(1) 連携の一例

いじめの問題は学校と児童生徒のみで取り組む問題ではなく、家庭や地域社会、関係機関と連携し協力体制づくりを進めていくことが大切です。



(2) その他の外部機関の利用

例えば、学校で法教育や人権教育を行うことで、規範意識を育てる効果が期待できます。専門的な内容を伴うので、教師だけでは困難な場合もありますが、法務省（法務局），日本弁護士連合会，弁護士会などが学校における法教育や人権教育についての取組を行っています。Webで指導資料を公開していますので、参考にすることができます。人権教育・法教育についてはP87～を参照してください。

法務省：「法教育」

<http://www.moj.go.jp/housei/shihouhousei/index2.html>

日本弁護士連合会：「法教育ってなあーに」

<http://www.nichibenren.or.jp/activity/human/education.html>

東京弁護士会：「いじめ予防授業 ～弁護士が伝えるいじめと人権のお話し～」

http://www.toben.or.jp/know/iinkai/children/houkyouiku/post_14.html

第二東京弁護士会：「学ぶ」

<http://niben.jp/manabu/>